

1900(明治33)年6月27日、日本赤十字社の佐野常民社長は、中国(清国)で戦争(義和団の乱)が始まったのに伴って戦病傷者が増えることを見越し、病院船博愛丸を中国の太沽港に派遣することを決断。その許可を桂太郎陸軍大臣、山本権兵衛海軍大臣に願った。

許可願の中で、日本人負傷者のみでなく外国の傷病者をも救護して、赤十字の精神を全うしたいと

原野 昇 緑地帯

1900(明治33)年6月27日、日本赤十字社の佐野常民社長は、中国(清国)で戦争(義和団の乱)が始まったのに伴って戦病傷者が増えることを見越し、病院船博愛丸を中国の太沽港に派遣することを決断。その許可を桂太郎陸軍大臣、山本権兵衛海軍大臣に願った。

許可願の中で、日本人負傷者のみでなく外国の傷病者をも救護して、赤十字の精神を全うしたいと

② 広島市のフランス人墓地

に、博愛丸派遣に関する訓令を発している。その中で、佐野の強い意志に沿って、日本人のみでなく外国の傷病者をも収容すること、そしてそのことを在太沽の各国軍の指揮官に通報するように指示している。

それと呼応して、現地のフランス派遣軍の責任者から東郷司令官に、フランス傷病兵の博愛丸への収容依頼がなされたのである。(広島日仏協会副会長 東広島市)

広島にフランス人の墓があるのを「存じ」だろうか。場所は比治山(広島市南区)の南側、放射線影響研究所の裏手にある比治山陸軍墓地の一画である。



原野 昇 赤地帯

200人余りが広島に搬送され、現在の基町アパート(中区)辺りにあった陸軍病院(広島衛戍病院)で治療された。そのうちの7人は治療のいかにもなく広島で永眠した。

葬儀は、研屋町(現在の中区立町辺り)にあったカトリックの天主教会堂で挙行された。彼らを葬る墓地として、市民と陸軍は比治

① 広島市のフランス人墓地

以来118年、墓地は比治山陸軍墓地奉賛会の手で、きれいに維持管理されている。その間、第2次世界大戦中にドイツと同盟関係にあった日本にとって、フランスは敵側の国であったが、墓は破壊されることもなく守られ続けてきた。比治山のフランス人墓地は、広島とフランスの友好関係の原点でありシンボルである。(はらの・のぼる 広島日仏協会副会長 東広島市)

(中国新聞〔2018.3.27 & 3.28〕に掲載された記事を転載)

1900（明治33）年7月14日、桂太郎陸軍大臣は、フランス傷病兵の治療の件で小池正直医務局長を広島に派遣し、現地で直接諸般の指示をさせている。小池医務局長が桂大臣に宛てた報告書によると、その指示は以下のようなものであった。

- ・トイレを改修して、またいで腰掛ける洋式大便器を設置すること。小便用注壁を改良し、換気をよくする。

緑地帯 原野 昇

- ・浴槽を洋式の舟形のものにする
- ・軽症患者や回復期の患者のために、大テーブルとソファを備えた談話室を整備すること。
- ・将校用病室には、洋式洗面台、鏡、衣掛けを設置すること。
- ・ベッドは階級差により、下士卒用には在来のもの、佐尉官用には別製、将官用には特別製の3種類

広島のフランス人墓地 ④

が用意された。マットも藁入り、馬毛入り、上等な馬毛入りの3種類、敷布団も掛け布団も各3種類が用意された。

食事も階級差により下士卒用、佐尉官用、将官用の3種類が、1日当たりの値段で示された。残された献立表を見ると、牛、羊、豚、子牛など多様な種類の肉、ハムやソーセージ、ニシンのほか、種々

の野菜が列挙してある。飲み物として、ワイン、ビール、日本酒も。また、普通食と特別食があり、特別食は普通食が食べられない患者に、嗜好と病状に応じて医官の命によって供された。

このように日本はフランス兵の治療に万全の体制で臨んだのみでなく、入院生活を快適に過ごすことができるようにと細かな神経を使っている。

（広島日仏協会副会長 東広島市）

中国（清国）での「義和団の乱」に際し、当初は日本赤十字社が陸軍の許可を得て、広島衛成病院でフランス傷病兵の治療に当たることになっていた。その後、日本政府は閣議で、治療は政府の責任で行うと決定。すなわち陸軍衛生部（病院）が責任を持ち、赤十字社が補助することになった。

その上で、外国人傷病者を陸軍病院で治療するのは初めてのことなので、その成否は陸軍衛生部の

緑地帯 原野 昇

評価だけでなく、日本国家の体面に関わるとして、芳賀栄次郎（後の軍医総監）をはじめとするえり抜き軍医を任命し、治療に万全を期することになった。芳賀はドイツで学んだエックス線技術を導入し、広島での応用が日本で初めてのエックス線診断となった。

当時の日本の指導者は、国際社会において日本が西欧の列強に伍

広島のフランス人墓地 ③

する近代国家として認知されるよう、必死の努力をしていた。そのために国際法を重んじ、それに類する国際ルール、中でも人道主義の尊重を率先して順守しようと、非常に神経を使っていた。

先述した山本権兵衛海軍大臣が東郷平八郎常備艦隊司令長官に宛てた通達の中でも、日本赤十字社の病院船博愛丸の保護と便宜供与

のほかに、日本が未批准だった戦時国際法の一つ、ハーグ陸戦条約の趣旨を先取りして実行するように通達している。

このような経緯で、中国で負傷したフランス兵120人余りが広島病院で、1900（明治33）年7～9月の3カ月間、治療を受けたのである。その結果、広島で永眠した7人を除く大半は快癒して帰国した。

（広島日仏協会副会長 東広島市）

（中国新聞〔2018.3.29 & 3.30〕に掲載された記事を転載）



子孫探しを依頼する筆者からの手紙を受け取ったフランスの七つの市町村長は、その手紙を市民籍の担当者や、可能性のあるような関係者に回した。子孫が見つかったアルターニユ半島の町ランヴェオックでは郷土史家の手を借りて、もう一つの町エダでは退役軍人の会の会長が、子孫を探し出してくれたのであった。その際、スーヴニール・フランス協会にも協力依頼がなされた。

原野 昇

スーヴニール・フランス協会と、祖國フランスのために命を落とした人の行為を記憶し、次の世代に伝えていくことを目標に「我らに記憶を、彼らに不滅を」を標語に掲げて活動している団体で、国内外にある墓地や記念碑の維持管理も行っている。共和国大統領後援の団体であり、名誉役員には首相、上院議長、下院議長らが名を連ねている。

比治山(広島市南区)のフランス人墓地には7基の墓があるが、その中央に記念碑が立っている。正面には次のような内容のフランス語が書かれている。「1900年に広島で死亡した中国派遣軍のフランス人兵士を記念して、また日本人の献身的治療に感謝して、在日フランス人と本国のスーヴニール・フランス協会とがこの碑を建立した」

エダにある戦没者記念碑には、二つの世界大戦で死亡した同町出身者の名前が書かれているが、1900年に広島で没した兵士の名はなかった。そこで町とスーヴニール・フランス協会と広島日仏協会が協力し、その兵士のためだけの大理石の記念銘板を作り、2004年6月に設置した。

(広島日仏協会副会長 東広島市)

広島市のフランス人墓地 ⑥

比治山陸軍墓地(広島市南区)の一角にある7人のフランス兵士の墓は、長方形の平らな石が置かれた、一基一基独立したキリスト教式の墓である。それぞれの墓石には、兵士の名前、所属部隊名、出生地、生年月日、死亡地、死亡年月日が彫られている。

5人の死亡地は「広島」とあり、中区基町にあった衛戍病院で死亡したものである。しかし、2人の死亡地は「宇品停泊地」となっている。

原野 昇

彼らは宇品港(南区)に着く前に船上で死亡した。

出身地は、南西部のボルドー、南東部のグルノーブル、西部のアンジエ、アルターニユ半島西端のランヴェオック、同半島南部のケルヴィニャック、パリ北東のアルトンジュ、中南部のエダである。

出生年は1868〜78年、死亡年月日は1900年7月21日〜9月19日の約3カ月間。死亡時の年齢は21〜32歳である。

何とかして子孫を探し出し、祖先の墓が広島にあり、今もきれいに守られているという事実を知らせることはできないか。そう考えた筆者は2002年7月、兵士たちの出身地、上記七つの市町村長宛てに手紙を出し、子孫探しを依頼した。その結果、七つの市町村の全てから返事があった。

五つの市町村からは、子孫を探し出すことができなかったというものであった。彼らの多くは未婚で戦地に赴き、亡くなったので、直系の子孫はいない。兵士にきょうだいがいれば、その子孫を探すのだが、それが至難の業であった。幸いランヴェオックとエダの二つの町からは、子孫が見つかったという返事が来た。

(広島日仏協会副会長 東広島市)

広島市のフランス人墓地 ⑤

(中国新聞〔2018.3.31 & 4.3〕に掲載された記事を転載)

幕末の1858年に日仏修好通商条約が締結されて150周年の2008年、日本とフランスでさまざまな行事が行われた。広島日仏協会は、比治山（広島市南区）のフランス人墓地に眠る兵士、および広島で治療を受けて帰国した兵士の子孫2家族7人を招待し、記念の慰霊祭を挙行了した。

式では、在日フランス大使館付武官のジェルビエ海軍大佐の感銘深いあいさつ、広島女学院大卒業

原野 昇

生の合唱団によるレクイエムの合唱に続き、子孫探しに尽力されたエタ町の退役軍人の会会長からのメッセージが読み上げられた。

その中で会長は「死者たちのことを忘れては彼らは一度死ぬことになる」という作家エリ・ヴィーゼルという言葉を引用し、同じ時間にエタでも広島での記念式に思いをはせていると連帯を表明した。1

⑧ 広島のフランス人墓地

1949年、広島大でフランス文学を講じていた中村義男教授が中心となって創設された。フランス語講座を実施する広島日仏学院の運営を活動の中心に、パリ祭やボジョレ・ヌーヴォー解禁に合わせた「日仏友好の夕べ」、フランス文化講演会などを続けている。来年は創設70周年。関心を持っていただければ幸いである。

（広島日仏協会副会長 東広島市）

〓おわり

筆者は2004年にフランスを訪れた際、子孫探しに協力してくれた村長を表敬訪問した。その時の様子が現地の新聞で報道されると、ある夫人が名乗り出てくれた。自分の祖父は、広島で死亡した兵士たちと同じ時期に広島病院で治療を受け、治癒して帰国したという。

翌年、直接お会いして話を聞いた。彼女の祖父は1900年に中国・天津で負傷し、博愛丸で広島

原野 昇

に搬送され、7月21日に宇品港に着き、広島衛戍病院に入院。9月29日に退院するまでの70日間、治療を受けたのであった。

その祖父は筆まめな人で、中国からも広島病院からも頻繁に手紙を書いている。宛先はフランスにいる女友達であった。帰国して除隊した後、その女性と結婚した。お会いした夫人の祖母に当たる人

⑦ 広島のフランス人墓地

である。兵士が広島で入院中にもあった日本の土産品と一緒に、祖母が大事に取っておいたそれらの手紙が、夫人の父親を経て受け継がれていたのである。

広島病院から発せられた手紙には、治療や生活の様子が詳しく書かれていた。例えば、毎日の医師の回診が非常に丁寧なこと、日本赤十字社の看護師の親切な対応

や、統制がよくとれていることなどが記されている。

「俺たちに不足しているものは、フランスの情報と娯楽とおいしいフランス料理だ。というのも、この国では西洋人とみれば何でもイギリス料理なのだ。まあ何とか食べられるがね」とも記している。

明治時代に広島病院で治療を受けた当事者の、貴重な証言となっている。

（広島日仏協会副会長 東広島市）

（中国新聞〔2018.4.4 & 4.5〕に掲載された記事を転載）